夫婦喧嘩は慎んで

日本の赤ちゃんがみな日本語を話している。この何でもない事実の意味することは、実は大変だったのです。鈴木先生は、この事実から、世界中が注目する教育法を発見しました。

大阪に育てば大阪弁が、東北に育てば東北弁が、赤ちゃんは、生まれ落ちた時から、これを耳にするから身につくのです。だから子供に美しい言葉を身につけさせたいと思ったら、赤ちゃんの時からきたない声を遠ざけ、美しい声をくり返して聞かせるようにすることです。

赤ちゃんの前では、夫婦喧嘩も慎まなければなりません。「赤ちゃんだから平気だ」ではなくて、「赤ちゃんだからこそ大変」なのです。親になったからには、子供のために、親自身がりっぱなお手本を示すべく努力しなければなりません。

早口でしゃべる親の子供は、やはり早口、乱暴な大声でしゃべる親の子は、やはり乱暴な大声、子供のよい悪いは、すべて親の責任であって、決して子供の責任ではありません。くれぐれも細心の注意がたいせつです。

赤ちゃんに語りかけることが必要

まだ言葉を聞き取る能力がないと思われる赤ちゃんに、よく語りかけているお母さんがあります。何かにつけて、とてもわかるまいと思うような言葉を、やさしい声で語りかける。これは無駄のように見えますが、じつは、これが大事な教育なのです。

すでに述べましたように、赤ちゃんは、それを大脳に記録しているのです。それだから、よく話しかけるお母さんに育てられた赤ちゃんは、言葉をよく覚え、言葉を使う能力を伸ばし、知能を高めるのです。

アメリカの幼児教育研究所で、生後一年くらいの幼児に、毎日わずか 15 分ぐらい話を聞かせてやるグループと、そうでないグループを作り、それを半年ほど続けた後にテストしてみますと、ただそれだけのことで、毎日話を聞かせたグループの幼児のほうが、知能がいちじるしく伸びていた、という調査報告があります。

だから、美しい声の“発声練習”のつもりで、できる限りやさしく愛情をこめて、子供に語りかけることが必要だということができます。